



ペチュニア

アメリカンタキイ

ふるいち ひろゆき
古市 浩之

ペチュニア「F₁ ディーバ」シリーズ

南米原産のナス科の1年草であるペチュニアは、春から秋まで長期間にわたり開花し、栽培が容易で、花色や花型の種類も豊富です。また、コンパクト型、匍匐型など草姿にもバリエーションがあり、園芸シーンに欠かせない人気品目と言えます。そのため、ペチュニアは品種開発が最も盛んに行われている草花の一つで、種苗会社のみならず個人育種家からも数多くの魅力的な品種が発表されています。

今回は、コンパクト型と匍匐型、両方の長所を併せもち、栽培性と観賞性を高いレベルで両立した種子系ペチュニア「F₁ ディーバ」シリーズをご紹介します。本シリーズは汎用性の高さが特長で、生産・流通・消費、いずれのシーンでも大きなメリットとなる特性を有しています。

また、近年のペチュニアはユニークな花色のものが流行ですが、「F₁ ディーバ」は、どんなシーンでも活用しやすいベーシックなカラーを中心に取りそろえています。花色豊かな10品種をラインアップし、単体はもちろん、各色を組み合わせての混植も自由自在です。

生産者、小売店、そして消費者の方に至るまで、あらゆるユーザー様に満足いただける「F₁ ディーバ」の特長と、それを引き出すための栽培ポイントを紹介します。

シリーズ特性

1 矮化剤使用量を低減できる（生産者視点）

コンパクト型ほど縦方向に伸びにくく、出荷後半まで株を張りながら整った草姿を維持できる特性を備えています。そのため矮化剤の使用軽減、または使用なしでの生産が可能で、省力化・低コストにつながります。

開花も匍匐型に比べ早咲きで、従来のコンパクト型とほぼ同等です。適温下では最短60日で開花し、側枝から咲く一般の匍匐型とは異なり、主枝から

開花するため、コンパクト型と同様、花付き苗出荷に適しています。

2 棚もち抜群（流通・小売視点）

一方で、適度な匍匐型の性質も有し、主枝の節間が短く側枝の発達が早いいため、株が立ち上がりにくくなっています。そのため店頭に長い間置いていても整った草姿を維持できます。また、従来の匍匐型に見られる、枝が伸びすぎて絡み合う点も改善されています。

3 長期間観賞が可能（消費者視点）

開花と生育のバランスがよく、次々と花を咲かせつつ、同時に枝数も増えて株が生育します。日本の環境下で選抜しているため強健で、春から夏、さ

らには秋まで安定したドーム型の草姿を保ちながら咲き続けます。従来品種のように徒長しすぎて株が割れたり、株の中心部に花がなくなったりすることはありません。また花弁も従来品種より強く、傷みが少ないため、長く楽しむことができます。

栽培ポイント

播種

清潔で病気の心配がなく、排水性、通気性のよい用土、または市販の培養土（タキイセル培土TM-1など）を使い、288×406穴程度のセルトレイに播種します。好光性種子なので覆土は不要ですが、用土表面が乾かないようにこまめな灌水が必要です。また、ペレット種子はしっかりと溶かさないと発芽不良を招くので注意します。

発芽適温は20～25℃で、発芽までの約1週間は温度を十分確保します。播種から発芽までは乾燥させると極端に発芽が悪くなるので、土の表面を乾かさないように管理します。本葉が出始めたところから液肥を週に1回程度与え始めます。育苗期間中は最低15℃程度を確保し、日中は20℃以上になるようであれば換気に努めます。

ポット上げ

播種後1カ月程度で本葉が3～4枚

になったところに、9cmまたは10・5cmポットに移植します。清潔で排水性のよい用土を使用し、あらかじめ元肥として「ロング」などの小粒の緩効性肥料を規定量混和します。定植時、深植えにすると根張りが悪くなるため避けてください。また葉が用土に埋れてしまふと病気が発生しやすくなり、光合成ができず生育も衰えるので注意します。移植直後は乾かさないうようにしっかりと灌水をし、根が活着したら乾湿の差をつけた灌水に切り替えることで、しまった質のよい株を作ることができます。

ネーミングの由来

タキイのペチュニアには、音楽にちなんだシリーズ名が付けられています。

「ディーバ」は、オペラの中でも抜群の歌唱力をもつ主役の女性歌手のことで「歌姫」という意味があります。数ある品種の中

でも、ひととき存在感を放つ、卓越したシリーズになることを願い、名付けられました。また、ラテン語では「女神」という意味もあり、花壇の女王と称されるペチュニアにふさわしいネーミングです。

作 型

【早春出荷】

10月下旬～11月下旬播種、3月上旬～4月下旬出荷の作型です。低温時期の栽培でじっくりと株ができるため、しまった質のよい株を作ることができます。暖地あるいは温暖な中間地では無加温栽培が可能です。厳寒期には最低5℃程度を維持する保温や加温が必要になる場合もあります。その場合は徒長しやすくなるがあるので注意してください。特に日中の温度が上がる時間帯はできるだけ換気に努めます。

【春から初夏出荷】 ◎おすすめ作型

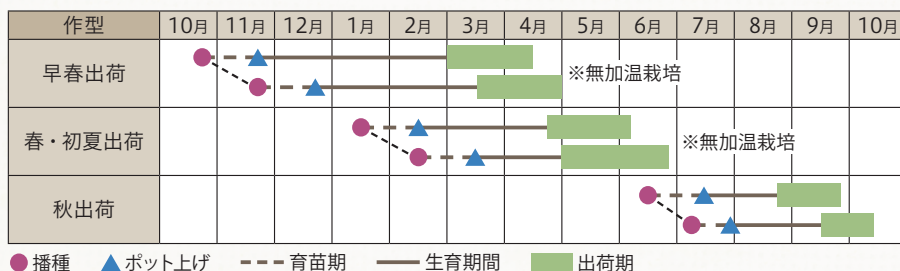
1月中旬～2月中旬播種で4月下旬～6月下旬出荷に対応する、最も一般的な作型です。こちらも低温時期の栽培なので、じっくりと株ができ、作りやすい作型です。また、短節間でまとまりのよい草姿になる「F1ディーバ」の性質を最大限に生かします。

5月の連休明けからの初夏出荷をねらう作型では、従来のペチュニアだと徒長を防ぐための矮化剤が不可欠でしたが、低く横張りにまとまる「F1ディーバ」なら矮化剤の量を低減できます。ただし、保温や加温をして早出しする場合は徒長しやすいため、日中の温度が上がる時間帯はできるだけ換気をするよう心掛け、必要に応じて矮化剤処理も行います。

【秋出荷】 ◎おすすめ作型

分枝がよく、草姿がドーム型にまとまる「F1ディーバ」は、秋出荷にも適しています。6～7月播種、9月出荷が一般的です。他の草花は作りにくい時期ですが、比較的容易に栽培でき、店頭の賑わいが少なくなる時期でもあるので、カラフルなペチュニアの需要も見込めます。

高温時期の栽培なので、徒長には注意が必要です。換気と控えめの灌水管理を基本に、必要に応じて適切な矮化剤処理を行います。この時期は消費者が「買ってすぐ楽しめる」ように、4号以上の鉢物として出荷するのをおすすめします。



栽培管理

す。追肥は週に1回程度を目安に、定期的に液肥を与えます。

全般的に乾燥気味の管理とし、十分に換気して徒長を防ぎます。基本的に、最低温度は10℃以上を保つとよいでしょう。しかし早春～春出荷では、栽培

期間はかかりますが、あえて低温に当てることで、しまった株を作ることができます。地域によっては無加温栽培も可能ですが、低温期の過湿による根腐れ、灰色かび病の発生には注意しましょう。

逆に、秋出荷のように高温期をまた

ぐ作型では、暑い時間帯に灌水すると苗が弱ってしまうことがあるので、できれば朝夕の涼しい時間帯に行い、30℃を超えるような時期は30%程度の遮光をおすすめします。

害虫は、アブラムシ、スリップスなどに注意し、早期防除に努めます。

混植の例



↑ ピンクリップ+ライム



→ ホワイト+トゥールブルー

栽培Q&A

Q. おすすめの出荷方法を教えてください

A. ドーム型にしっかり株が張る特長を生かし、鉢物として出荷するのがおすすめです。4号以上のサイズの鉢に1株植えにし、複数輪開花させて差別化、高付加価値化をねらいましょう。

また、2品種を用いた混植での出荷もおすすめです。4号程度の鉢に2株植えにし、1株植えと同様複数輪開花させるとよいでしょう。写真の混植例も参考にしてください。